

## 健康から病気までを科学する薬学

吉山友二

## Pharmaceutical Care from Health to Illness

Yuji YOSHIYAMA

*Division of Community Pharmacy, Center for Clinical Pharmacy and Clinical Sciences, Kitasato University  
School of Pharmacy, 5-9-1 Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108-8641, Japan*

有吉佐和子の小説「恍惚の人」は、「生」と「死」の間に「老」という人間にとって避けることができない問題があることを主題として書き上げられている。これまで、薬学は健康でなければ病気、と二分して考えていたかもしれない。健康と病気の間には、ill-health という「病める健康」ゾーンが横たわっていると考えられる。糖尿病になる手前の耐糖能異常で血糖が高い状態を境界型と言うが、そのままではよいのか？ 虫歯などを軽く考えて放置するとどんな結果を招くのか？ といった、身近なことについての疑問もたくさん見受けられる。また、予防的健康相談や未病の状態にある方々からのサプリメントや各種健康食品に係わる健康相談の実例と対応や、薬剤師がスポーツを通じた健康と薬の関係に貢献することも大切な課題と考えられる。

本誌上シンポジウム「健康から病気までを科学する薬学」の焦点は、薬学も ill-health に上手に対応するように関連知識を情報提供することである。ill-health がファーマシューティカル・ケアの実践の一部として、薬剤師に応用されるきっかけにして頂ければ幸いである。各総説の概要を以下に示す。

1) 「歯性感染症の肺感染症に及ぼす影響と対策」では、新里 敬氏（中頭病院感染症内科）より、誤嚥性肺炎への適切な対応の必要性とその予防には歯性感染症のコントロールとしての「口腔ケア」が注目されていることが提示されている。歯性感染症が肺の感染症を引き起こすことは意外に知られていない。たかが虫歯・歯周病、されど、である。歯性感

染症は、全身感染症の引き金になることを再度確認したい。高齢化社会が到来し、一方で、耐性菌が市中感染症にまで拡散した今、高齢者の感染症に対しては、抗菌化学療法だけにとらわれない新たな予防戦略が問われているとの示唆に富む提言がなされている。

2) 「納得医療 ～その治療、あなたにとって正しいですか？～」では、嵯峨崎泰子氏（日本医療コーディネーター協会）より、医療コーディネーターが目指していることは、予防的健康相談の実践により、病気や生活障害を防ぐ「事前介入」であることが言及されている。まさに、ill-health ゾーンでの活動である。患者・家族の納得のいく医療を提供するためには、薬剤師を含む医療者が、生活障害の視点で患者の状態を観察した上で、本当に必要な医療を提案し、患者・家族にその医療への理解を求めていく係わりの必要性を概説した貴重な内容である。

3) 「予防薬学を志向した保険薬局からの研究発信」では、野田敏宏氏（十仁薬局、北海道薬剤師会）より、保険薬局の薬剤師は、病気の状態にある患者だけでなく、健康若しくは未病の状態にある方々からのサプリメントや各種健康食品に係わる健康相談を受ける職種であるという貴重な役割が概説されている。サプリメントや健康食品に関する薬剤師への期待が薬剤師自身の認識以上に高く、薬局薬剤師は科学的な視点を持って質の高い情報を選別し、その情報を能動的に発信することが期待されている。日々の保険薬局の業務からテーマを抽出して検証し、さらにその研究成果を薬局利用者へフィードバックすることは、保険薬局ならではの研究発信の方法として大いにその成果が期待される。

4) 「薬剤師のためのドーピング防止リファレン

ス」では、笠師久美子氏（北海道大学病院薬剤部）より、薬物等の誤用や濫用による「ドーピング」は、一部の作爲的な行為によるものばかりではなく、医薬品やドーピングに関する知識不足による使用も多く含み、結果的に同様の制裁を受けるのが現状となっていることが指摘されている。ドーピング撲滅のために薬剤師が介入できる事項としては、ドーピング・コントロール（ドーピング検査）、薬に関する啓発・教育・相談、医薬品情報の提供、禁止物質の治療目的使用に係る除外措置（TUE）に関する支援などが挙げられる。これらは、医薬品情報管理業務や薬物モニタリング等の知識や経験を十分に活用でき、ひいてはスポーツにおける適正な医薬品使用につながるものであり、薬剤師がドーピング防止活動に介入できる可能性が魅力的に解説されている。

5) オーガナイザーの根岸健一氏（武蔵野大学薬学部）により、「病気としての褥瘡予防」と題して、健康から病気までを科学する薬学を総括した。薬剤師にとって患者とは病人であり、病人以外は健康人であると無意識に思い込みがちである。多くの患者が健康ではないが病気でもない ill-health という「病める健康」ゾーンを通過して病人になっていると思ひ至る。寝たきり老人に多くみられる“褥瘡”に対する適切な対処例も、薬剤師が「病める健康」ゾーンにある人々を病気に至らせて QOL を損なわせないアプローチであり、ファーマシューティカル・ケア実践の展開が大いに期待される。

シンポジストであるが誌上シンポジウムに参加しなかった、「新たな糖尿病の治療体系の意義：境界型糖尿病は病気でないと言えるか？」と「後期高齢

者のプライマリ・ケアにおける医薬品適正使用」の概要を記す。石田 均氏（杏林大学医学部）より、「境界型」糖尿病では、既に脂質異常症や高血圧を有する場合が多く、動脈硬化に起因する狭心症や心筋梗塞・脳梗塞の発症率が糖尿病と同程度に高いことから、病気でないと言い切れないことが提言された。わが国の糖尿病患者数の推移を勘案しつつ、「境界型」の増加を阻止しない限り、糖尿病の増加の流れを逆に減少に転ずることができないと結論した。また、吉山友二（北里大学薬学部）は、後期高齢者における医薬品の適正使用と安全管理のための取り組みについて、入院医療及び外来医療という継続あるいは相互間のケアで役割を果たすことが求められていることから、お薬手帳のよき運用が後期高齢者における医薬品の適正使用と安全管理に果たす意義は大であると結論した。

本誌上シンポジウムは、2009年3月に開催された日本薬学会第129年会でのシンポジウム「健康から病気までを科学する薬学」での発表を元に、シンポジストの先生方に最新の知見をまとめて頂いた。ファーマシューティカル・ケアの実践に関する誌上シンポジウムをまとめることは、相互の会員にとって大変有意義なことと思われる。臨床はもちろんのこと、基礎とよき相互連携しつつ、ファーマシューティカル・ケアを展開したいものである。これらの誌上シンポジウムの内容を通読することにより、ill-health を含めたファーマシューティカル・ケアの実践に応用することが薬学関係者の腕の見せ所と確信している。